

名古屋産業大学およびその周辺に発生するきのこ調査

Field Study on Funguses Growing in Areas adjacent to Nagoya Sangyou University

菊山功嗣・中條長昭

KIKUYAMA Koji & CHUJO Nagaaki*

*西尾きのこ会、Member of Nishio Kinoko-Kai

Abstract: Funguses have been playing an important role to close the chain of lives on the earth by resolving dead plants and animals into inorganic substances. In spite of this important role the ecology of funguses around our living spaces has been left unrevealed. In the present study funguses growing in the area adjacent to the University were observed and their ecological conditions were investigated through a year. Many kinds of funguses including edible and toxicological ones were gathered in the Shiroyama Park, the free spaces adjacent to the University and the Aichi Shinrin Park.

Keywords: Funguses, Edible Fungus, Toxicological Fungus, Aichi Shinrin Park

1. まえがき

今日、地球環境を守る課題が、日常生活を通してエネルギー、食料、住居などあらゆるところで考慮され、“エコ”、“無農薬” “環境“にやさしい”などの名称のつく商品開発がされている。しかし、地球上では生物の発生以来、生産、消費、還元的作用が繰り返されて、それらのバランスが最適にコントロールされ、今日の美しい地球環境を形成してきている。ここで生産とは、主として植物の光合成による無機物から有機物の形成であり、消費とは主として動物による植物の消費また動物間の食物連鎖を指す。一方還元とは枯れた植物や倒木、動物の排泄物や死体などの有機物を再び無機物の還元する作用であり、これは専ら菌類の仕事である。この菌類による分解作用が存在しないと、植物の生育のもとになる栄養分は供給されず、繁殖はありえない。今日のように工業製品の廃棄、リサイクルなどが大きな問題となっているが、自然界では脈々とこのリサイクルが行われてきた。

われわれはこの還元行動の主役である菌類のうちでもっとも高等であるといわれるキノコに着目した。キノコの生態は、カビと良く似ているが、同じ菌類でも、キノコは生物的な構造の違いで、限りなく動物に近い高等生物に分類される。

その特徴は、たとえば高等生物の場合オス・メスや、オシベ・メシベのような器官が存在して子孫を残す働きをするのと同様に、キノコは通常は菌糸として、地中や寄生生物に生息し、そこで分岐と結合をくりかえし、気候、温湿度などが子孫繁栄に好都合な条件になると、比較的密な菌糸の組織からなる子実体、いわゆるキノコの形態をとり、そこから胞子を放出するからである。

本研究は大学周辺および多種のキノコが発生すると考えられる愛知森林公園を調査の対象として、季節、発生場所によるキノコの生育状況の変化を観察、撮影、採集し、その分類を行い、将来それらの結果を一般に広報し、市民に身近な生き物に関心を喚起するとともに、危険なキノコの発生を知らせ、これによる食中毒の発生を予防することにある。また蓄積されたデータをもとにして、キノコ同定のソフト作成を目指す。

2. 調査の場所

図1は本学周辺の地図である。大学周辺では地形的にも、環境的にもキノコの発生に適していると考えられた大学西側の空地を調査の対象地域とした。また、城山公園内も観察し

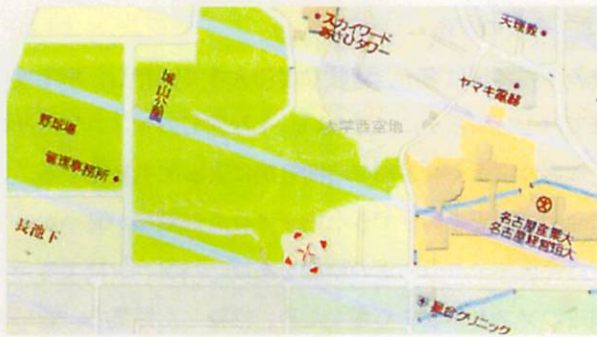


図1 大学辺図



図2 ムラサキシメジ



図3 ハタケシメジ

月日	場所	きのこ名	食、毒
06.10.24	城山公園	カワラタケ	
06.11.7	大学西空地	イロガワリウセンタケ ムジナタケ フウセンタケ コツブタケ ハタケシメジ	食
06.11.21	大学西空地	ツチグリニセショウロ ヒメスギタケ キイロコツブタケ ニセショウロ ノウタケ	
06.12.6	大学西空地	ムラサキシメジ アシナガタケ	食
07.5.8	大学西空地	ナガエノスギタケ	

表1 大学周辺で採取されたキノコ

たが、公園内では清掃、草刈などによって、キノコの発生が阻害され、観察種はきわめて少なかった。一方、愛知森林公園は広大な緑地を有し、年間を通し多くの種類のきのこが発生し、本研究実施期間内ではその全容を把握することは不可能であった。

3. 調査結果

3.1 大学周辺 表1には大学周辺の空地で採取したキノコを採集月日ごとに示す。大学西側空地、墓地周辺および城山公園で発生するキノコの種類は限られていた。しかし墓地周辺ではムラサキシメジ(図2)、ハタケシメジ(図3)

などの食用きのこが観察された。ハタケシメジは外部から持ち込まれた木片に付着した胞子から発生する。大学西側の空地では砂利を敷き詰めた平地からホコリタケ、キイロコツブタケ(図4)、ニセショウロ(図5)、ノウタケ等の腹菌類と草叢からヒメスギタケ、アシナガタケなど小型のキノコが観察された。



図4 キイロコツブタケ



図5 ニセショウロ

3.2 愛知森林公園

07年6月以降月1、2回のペースで広大な公園内のキノコ発生調査をおこなった。得られた種類は非常に多く、自然が多く残されていることが、キノコの発生からも知られる。公園内ではヒラタケなどの食用きのこが採集された反面、テングツルタケ(図6)、ヒメコナカブリツルタケ(図7)、アカハテングダケ(図8)、など毒性のキノコが発見されている。

3.3 今後の課題

きのこの発生は場所、天候などに大きく依存し、単年度の調査では十分明らかにできない。また同名のキノコでもその色、形態は場所や発生後の時間経過によっても変化する。さらに今回の調査で同定できないキノコも何種類か見つまっている。今後キノコの同定の精度をあげ、パソコンによるキノコ同定のソフト作成をめざすため、継続した採集と、胞子の顕微鏡観察などを進める必要がある

月日	名前	特徴	月日	名前	特徴	月日	名前	特徴
07.6.12	スエヒロタケ		07.7.10	シロハツモトキ	毒	07.9.11	クサイロハツ	食
	ヒイロタケ			タマコタケモトキ	猛毒		チャヒラタケ	
	タマキクラゲ			ニセクロハツ	毒	07.10.15	アラゲカワラタケ	薬用
	チャワンタケ			ヤマドリタケモトキ	食		コフキササルノコシカケ	薬用
	アラゲコベニタケ			07.9.11	キクバナイグチ		食	ヒイロタケ
07.6.26	アオソメタケ		キアヤマドリタケ			ヒラフスベ		
	カレバキツネタケ		ムラサキヤマドリタケ			ホコリタケ	食	
	クロトマヤタケ		ヒメコナカブリツルタケ		毒	07.11.12	ドクベニタケ	毒
	コオシタケ	食	テングツルタケ		毒		アカヤマダケ	毒
	ミスゴケノハナ		ベニイグチ				クサイロハツ	食
07.7.10	コゲチャヤマドリイグチ	毒	ブドウニガリイグチ				スッポンタケ	
	アカハテングダケ	毒	テングツルタケモトキ		毒		チャツムタケ	
	ヌメリコウジタケ	食	オオミノコフキタケ			ニガクリタケ	毒	
	コツブタケ		アカカハイロタケ			フウセンタケ		
	シロカイメンタケ		ハラタケ		ホコリタケ	食		
	ニオイコベニタケ		キイロイグチ	食	ムカシオオミダレタケ			
キヒダタケ	毒	ヨゴレアミアシイグチ		07.12.10	ヒラタケ	食		

表2 森林公園内で採取されたキノコ
(キノコの毒性、食性は文献 [1] による)



図6 テングツルタケ



図7 ヒメコナカブリツルタケ



図8 アカハテングダケ

文献[1] ”キノコ図鑑“：本郷次雄監修 幼菌の会編 家の光協会